

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第894号 平成27年3月10日

若者よ、献血しようぜ！

献血する若年層の減少に歯止めがかからず、その一方では高齢化が進み、このままでは2015年（平成27年）以降、手術や治療で血液が不足する恐れが出てきたと日本経済新聞（1月9日付）の記事は伝えています。



私は若い頃から献血が趣味みたいなところがあって、これまで随分と献血して来ており、日本赤十字社からも感謝状をいただいたりしています。



もっとも、献血出来るのは採決する中身にもよりますが、原則16歳から69歳までとなっていますので、私が献血出来る期間はあと僅かとなってしまいました。

血液センターに行くと、若い方達も途切れる事無く献血に来てているように見えるのですが、それでも必要量はカバー出来ていないというのですから、事態はかなり厳しいといわざるを得ません。

献血は健康な人であれば、誰にでも簡単に出来るボランティア活動です。



今更いうまでもない事ですが、血液は生きた細胞ですから長期保存する事は出来ませんので、常に、若くて元気な血液の確保が求められています。



日本赤十字社の血液事業がスタートしたのは今から60年以上も前の1952年（昭和27年）の事ですが、1955年（昭和30年）頃から民間商業血液銀行による売血が盛んとなり、献血者が激減する一方、いわゆる「黄色い血」といわれる輸血に適さない血液が出回るといふ大きな社会問題が生じる事となりました。

このため政府は、1964年（昭和39年）、輸血用血液は献血により確保する体制を確立するよう閣議で決定し、逐次、民間商業血液銀行による買売血や預血制度が廃止され、1974年（昭和49年）以降、輸血用血液は献血によって100%まかなわれる体制が確立し、今日に至っています。

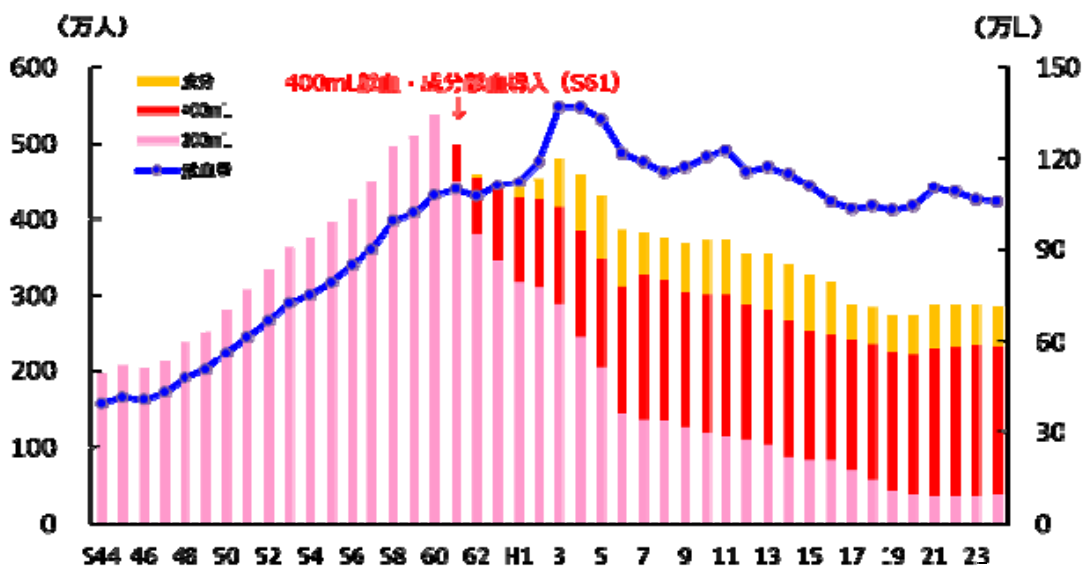
また、厚生労働省や日本赤十字社は、「安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律」に基づき、血液製剤の安全性の向上や安定供給の確保はもとより、献血者の保護についても十分配慮しています。

なお、中にはエイズの検査を目的に献血する者がいるようですが、このような行

為は絶対にすべきではありません。何故なら、日本赤十字社では、献血された血液について「血清学的検査」と「核酸増幅検査（NAT）」という2種類の検査でチェックしていますが、如何なる検査でも絶対は有り得ないからです。もしもエイズ感染の疑いが少しでもあるのなら、何はさておいても専門の検査機関で検査を受けるべきです。

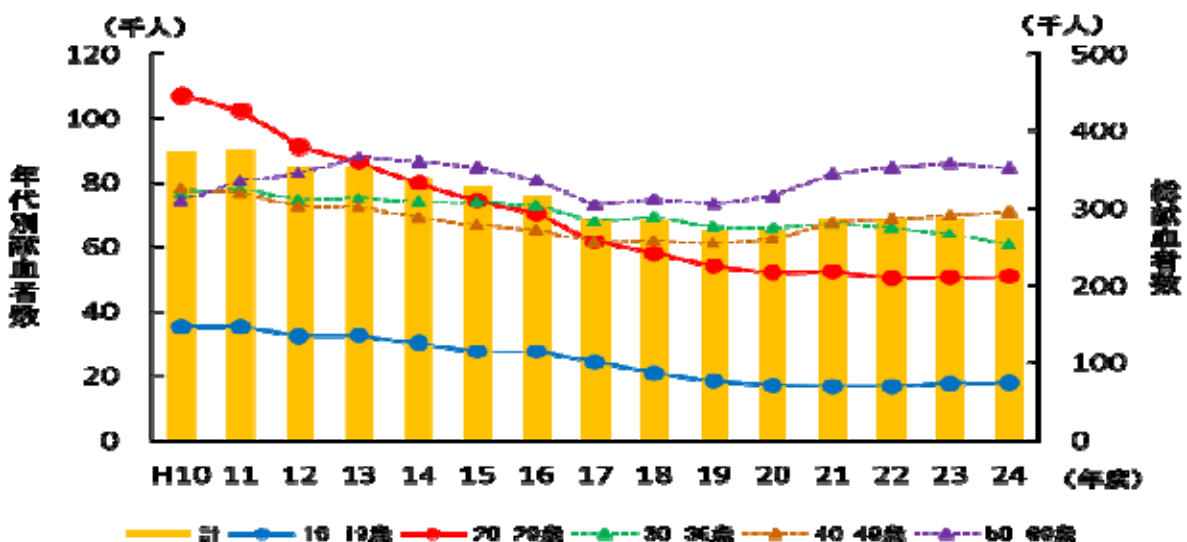
ところで、札幌の地下通路を歩いていると「血液が不足しているので献血に協力して欲しい」と必死に呼び掛ける血液センター職員の姿を良く見掛けるのですが、一体、道内の献血の状況はどうなっているのでしょうか。

下のグラフは、1969年（昭和44年）以降の献血の状況を示したのですが、献血量は平成3、4年頃をピークに減少傾向にある事が分かります（北海道赤十字血液センター作成の資料から）。



北海道赤十字血液センターでは、献血者が減少した背景として1986年（昭和61年）4月から導入されている400mL 献血と成分献血を上げていますが、もしそうであるなら意外な感じというより、皮肉な現象だといわざるを得ません。

なお、献血者数の年齢別推移は下のグラフの通りとなっています（北海道赤十字血液センター作成の資料から）。



少子高齢化の影響で、献血可能年齢である若い世代の人口が減っている事は確かですが、それだけが果たして原因なののでしょうか。

日本赤十字社の調査によると、若い方々が今まで献血しなかった理由の1位は「きっかけがなかったから」という事だったそうです。

若者にとって献血は遠い存在という事かも知れませんが、「きっかけ」という事でいえば、高校や大学の卒業式、成人式や結婚式、更には就職等々、人生に幾つもの節目がありますので、そうした機会が献血に結び付くよう、効果的なPRに一層努める必要があるでしょう。

また、折角献血をしようとしても、体重が軽いとか貧血といった健康上の理由で献血を断られる場合も少なくない様です。若者達には、せめて献血出来る程度の健康体を保持して欲しいものです。

如何に医学が進歩しつつあるとはいえ、今のところ血液を人工的に作る事は出来ません。その意味からすれば、現代医療は献血者の善意で支えられているといっても過言ではありません。

献血という善意が、身も知らぬ誰かの命を救っている事は確かです。そうした命の繋がりを若い人にも感じて欲しいと思います。

より多くの10代から20代の若者達が、その善意の輪に積極的に参加してくれる事、それによって献血者がもっともっと増えて行く事を心から期待しています。

(塾頭：吉田 洋一)